学位請求論文要約

大悲の浄土 ―鈴木大拙の浄土教観―

真宗学専攻
池田 向一

目次

序章

第一節　本論稿の目的と考究の手法

第二節　鈴木大拙の浄土教観の研究の意義

第三節　鈴木大拙の生涯と浄土教との関わり

第一章　即非の浄土

第一節　矛盾の立脚地

第二節　円環する浄土――『浄土系思想論』における鈴木大拙の浄土教観

第三節　『浄土論註』における無功用行と鈴木大拙

第二章　妙用の浄土

第一節　浄土のダイナミズム

第二節　名号論

第三節　摂化する名号――『浄土論註』と鈴木大拙

第三章　大悲の浄土

第一節　包摂する浄土――『日本的霊性』を中心として――

第二節　一人の自覚――霊性の自覚的顕現

第三節　大人の子供――妙好人浅原才市と鈴木大拙

結章

第一節　鈴木大拙の浄土教観が開く真宗教学の視座――その還相回向観を巡って――
第二節　本論稿の総括と今後の課題
第三節　結語

本論稿の目的と考究の手法

鈴木大拙（一八七〇～一九六六）は明治・大正・昭和を生きた仏教学者・禅学者・思想家である。本論稿は、その大拙の広汎な思想体系の中でも浄土教思想及び特に真宗理解を明らかにしていくことを目的としている。

また本論稿は研究の範囲を大拙の浄土教観に絞り、そこに親鸞（一一七三～一二六二）思想および真宗教学がいかに応答していくのか、という立場から論じられている。これは筆者があくまでも親鸞教学の中において大拙の浄土教観を位置づけたいという欲求によるからである。

この目的にあたって本論は三つの視点を設定した。その三つとは、一つ目は「即非」、二つ目は「妙用」、三つ目は「大悲」である。この三つの視点ないし言葉は、それらを以って大拙が明確にその思想を展開したわけではない。しかし筆者はあえてこれらの視点を設定することで、大拙の浄土教観を多面的に探求する糸口とし、その思想的意義を明確なものにしようとしたのである。

大拙は日本のみならず、世界的にもよく知られている存在であるが、これまで多くの場

合、その認識は「Zen Buddhist, D・T・Suzuki」を前提とするものであった。そのため暗黙の内に大拙の浄土教観は大拙の思想全体の傍流に位置づけられたり、また真宗学者からも「禅から見た真宗」と見做されたりすることが多かった。しかしながら、そのような観点からこの問題を扱うと、多くの場合、それは真宗教学に対して適切か否か、といった関心のみに議論が終始してしまい、その思想の持つ可能性・発展性に目を向け、さらには真宗教学が積極的に応答していこうとする姿勢には至らないという問題点を持つものである。本論稿はそのような問題意識を基底として、真宗教学側からも積極的に応答できる手段として先に挙げた三つの視点を設定したのである。ただしこの三つは筆者の恣意的観点というよりは後に確認する「即非の論理」への洞察によって必然的に生じてくる視点であり、広汎な大拙の思想を渡る有益な指標ともなることは論を進めていく内に明らかとされるという点はここで付言しておきたい。

研究の手法として、大拙の浄土教観に関する著作は和文英文を問わず広く参照することとする。また英文の場合はできるだけ原文を参照し和訳することにした。また著作の中でも特に一つの纏まった主題の下に論が展開するような書物、例えば『浄土系思想論』（一九四二）、『日本的霊性』（一九四四）、『妙好人』（一九四八）などには特別な注意を払った。

なお、本論稿の目的の大部分は大拙の真宗観を明らかにすることであるが、形式上は「大拙の浄土教理解」あるいは「大拙の浄土思想」と表現している。それは大拙の宗教理解が広汎に及んでいるために、浄土教関連の言説においてもできるだけ広い意味合いを持つ言葉を用いなければならなかったからである。

第一章　即非の浄土

鈴木大拙の思想的立脚地を考える上で、「即非の論理」についての理解は欠かすことができない。第一章は即非の論理と大拙の浄土教観との関係を中心に考察をしている。

本章第一節では先ず即非の論理についてその概略を述べる。第二節では、大拙が浄土と娑婆の関係をもまたこの即非の論理によって理解しようとしている点を確認する。そして第三節では前節で言及した大拙の利他・無功用行理解と『浄土論註』との思想的親和性について論証を行う。

即非の論理「AはAではない故にAである」において、三つのAはそれぞれが各々の領域を保持しながら常に循環的・円環的であるとされている。そして大拙はこの即非の関係から浄土と娑婆を「非連続の連続」として捉え、絶対的に異なり排他的な関係ではあるが、それにも関わらず互いに働きかけ合い、円環的な関係を結ぶもの（「矛盾即自己同一」の関係）として規定するのである。

本章はこの論理よって把握される浄土と娑婆の関係性は、所謂「回心・目覚め」などと呼ばれるような宗教経験を本質とする「心」の発起において、直観的かつ内的に把握される構造理解として考えられるのではないかと提起している。そしてこの矛盾・円環的浄土観を「即非の浄土」と名づけたのである。

第二章　妙用の浄土

第一章では即非の論理を宗教心に関わる論理として扱った。しかし宗教心と言っても大拙にとってその心は個人的な心情を表わす概念としては用いられていない。むしろこの場合の宗教心とはこの分別の世界を限りなく創造し続ける動性（妙用）そのものか、あるいはそのような在り方に通暁していくような心を示している。第二章ではそのような即非の論理の持つ動的で創造的な働きへの言及に注目し、その理解が大拙の浄土教言説においてはどのように理解されているのかを論じている。

第一節では先ず前章で取り上げた即非の論理が大拙の仏教における体用理解と密接に関わっていることを確認している。仏教では「体」を本体、本性、如というように静態的に捉え、また「用」を作用、現象、方便というように動態的に捉える。大拙の言及は一応は体用一致を主張していると言えるが、その理解は明らかに用を中心となすものである。むしろ大拙の言う体用一致とは用が体を「生み出す」ことを意味している。

ではその創造的な働きである「妙用」とは具体的にはどのように働くのであろうか。そのことを考える上で中心となるのが大拙の大行・名号理解である。大拙の名号観は時期によって変遷があるものの、即非の論理の定式化以降大拙は名号を真実界と方便界を往還し続ける一句の言葉となった如来そのもの、として理解するようになる。第二節はそのような大拙の特異な名号理解について論じている。

また大拙の名号理解は実際には多義的で複雑な意図を持ちながら展開される。その中で

もとりわけ、名号を称えるのではなく、名号を聞くのでもなく、「名号に成る」という言い方は特徴的である。従来、大拙の名号を中心とした浄土教理解は一遍（一二三九～一二八九）の思想に近いものであるという指摘がされてきた。しかし本章第三節ではそのような通説に対して改めて検討を加え、その言説はむしろ大拙の『浄土論註』観を検討した上で論じられなければならない性質のものであると提起している。

第二章では「妙用」を動的で創造的な働きとして「即非」と表裏一体の関係となるものとして扱う。そしてその動性が浄土教理解においてはどこまでも動的で創造的な名号の事実として捉えられていることに注目し、本論ではその一連の理解を「妙用の浄土」として再構築したのである。

第三章　大悲の浄土

第三章では前二章で見てきた大拙の浄土教観を「大悲の浄土」という概念から考察していく。大悲（mahākaruṇā）とは仏のあらゆる条件に束縛されることのない、平等な慈悲心を示す言葉であるが、この心は、誓願となり不可思議光如来・無量光明土の根源としてあるときにその本質を全うする。また仏身仏土も大悲によって支えられるからこそ、その領域を確かなものにする。「大悲の浄土」とは仏の平等な救済を願う心を、浄土として「包み、生み出す」領域として捉え直した言葉である。本章では即非の論理を仏の大悲の包摂性を描写しうる論理として論じている。

第一節では特に昭和一九年の『日本的霊性』に注目する。霊性に関するこれらの書物は

『浄土系思想論』における諸論文などとはまた別の側面をよく表しており、同書は本章の主題である「大悲の浄土」について考察する上でもまた重要だからである。第二節では、霊性という意識を大拙の『歎異抄』理解に着目しながら考察する。大拙の浄土教観においてはしばしば『歎異抄』への言説が見られ、霊性の具体的な顕現とはどのようにあるべきかという観点からもそれらの言及は見逃すことができない。そして第三節では妙好人浅原才市を取り上げる。晩年になるほどに大拙は才市への言及を増やしていく。それはこの具体的人に大拙の最も大切にする宗教性がよく顕現されていると考えられるからである。

以上のように本章の主題は包摂者から被包摂者へと移り変わる構成となっている。両者の関係を記述することで、「包み、包まれる」浄土のあり方を「大悲の浄土」として提示することが本章の目的である。

結章　第一節　鈴木大拙の浄土教観が開く真宗教学の視座――その還相回向観を巡って――

結章では特に第一章で述べた大拙の還相回向観が真宗教学においてどのような位置づけを得られるのかについて考察している。その際、議論の前提となるのはこれまで二種回向に対して先学によってなされてきた大別二様な見解である。その二つとは、

①回向を衆生の相、衆生の往還として捉える見解。

②回向を信の成立する根拠、原理的なものとして捉える見解。

というものである。①は往相還相を衆生の相として順序だったものとして考える。その場合、還相がどこの時点で成立するのかという議論が生じる。②は往相還相は性質は異なっ

ても同時に成立するものとして考える。その場合、二種回向は獲信の根拠として理解される。従来大拙の回向観は①の範疇として捉えられることが多かった。また②を提起した代表的な人物は寺川俊昭（一九二八～二〇二一）である。こうした観点を踏まえて近年、長谷正當は①の真意に通暁した人物として鈴木大拙を位置づけた上で、どちらも親鸞の理解に見られるものであるから、どちらかを排斥するのではなく、両説を統合的に理解するべきであると主張している。

本節ではこの長谷の試みを継承し、筆者の立場からその統合理解を模索することで、大拙の還相回向理解を真宗教学の範疇として位置づけうる視座を提起している。筆者は大拙の回向観は①にも②にもまたがる広いに関心によっていると述べ、その動的な回向観を十分に理解してこそ、統合理解は果たされると主張している。

本論稿の考察を終えて

従来大拙の浄土教観は「禅から見た真宗」として評価され、一定の理解は示されつつも、真宗教学の立場から積極的に応答しようとされる試みはなかった。本論稿はそのような暗黙の内に前提とされてきた理解を問い直し再検討を遂行している。また本論稿での考察を終えて筆者が確信するのは、大拙の根本関心を十分に担うことができるのはその思想の中でもむしろ浄土教言説の方ではなかったかということである。徹底的な動性の重視は必然的に大悲の立場を重視させ、その大悲は一切衆生を包摂するべく浄土を創造しなければならない。そのような大拙の浄土教観の持つ諸要素は真宗教学から積極的に応答する意義があり、本論稿の試みによってそのことがより一層明確となった。